

令和5(2023)年度  
文部科学省「青少年国際交流推進事業」委託事業

# 日独学生青年リーダー交流事業

## 報告書



National Institution For Youth Education  
国立青少年教育振興機構



# 目次

事業概要	1
------	---

## <派遣事業報告>

1. 参加者名簿	4
2. 日程	5
3. ダイジェスト	6
4. 学習成果発表会	15
5. 参加者アンケート	21
6. 個人レポート	22
7. 交流事業を終えて	32

## <受入事業報告>

1. 参加者名簿	36
2. 日程	37
3. ダイジェスト	38
4. 学習成果発表会	44
5. 成果と課題	52



## 事業概要

### 1. 事業趣旨

ボランティア活動を行っている日本とドイツの学生の交流を推進することで、高い国際感覚を備えた青少年を育成する。

### 2. 実施関係機関

#### (1) 主催

日本：文部科学省

ドイツ：家庭・高齢者・女性・青少年省

#### (2) 実施

日本：独立行政法人国立青少年教育振興機構

ドイツ：ベルリン日独センター

### 3. 研修テーマ

若者の社会参画

### 4. 参加人数

日本：10名、引率者2名

ドイツ：8名、引率者1名

### 5. 日程

#### (1) 派遣

事前研修 7月29日(土) ※オンラインで開催

派遣 9月12日(火)～9月26日(火) 15日間

#### (2) 受入

日本受入 8月27日(月)～9月11日(月) 15日間



# 派遣事業報告

## 1. 参加者名簿

	氏名	所属団体	学校名
団長	梅津 孝一	国立信州高遠青少年自然の家	
副団長	望月 奏	国立江田島青少年交流の家	
1	井上 紗彩	特定非営利活動法人 しずおか共育ネット	慶応義塾大学
2	小笹 倫子	大阪航空少年団	同志社大学
3	加藤 徳子	公益社団法人 上越国際交流協会	上越教育大学大学院
4	川添 由貴	一般社団法人 NO YOUTH NO JAPAN	関西学院大学
5	小田島 理月	東北大学 SCRUM	東北大学
6	手塚 颯一郎	もしもプロジェクト青学	青山学院大学
7	中澤 彩乃	新潟青陵大学学生ボランティア コーディネーターぼらくと	新潟青陵大学
8	藤島 香緒里	宮城県大崎市 鳴子国際交流協会	宮城県 古川黎明高等学校
9	前田 遥夏	Peace Night Hiroshima	叡啓大学
10	水野 竣木	ベネブレイク@学生まちづくり	岐阜工業高等専門学校



日独学生青年リーダー交流事業日本団

## 2. 日程

月 日	滞在地	時間	プログラム
9月11日 (月)	東京	夜	羽田空港 発
9月12日 (火)	ベルリン	午前 午後	ベルリン・ブランデンブルク空港 着 打ち合わせ
9月13日 (水)	ベルリン	午前 午後 夜	説明：ベルリン日独センター概要 オリエンテーション 講義・ワークショップ：子ども・若者の参画 講義：ドイツの青少年育成活動概要 団ミーティング
9月14日 (木)	ベルリン	午前 午後	ベルリン市内歴史研修 訪問：プント・ユージェント（ドイツ環境自然保護連盟青年部）連邦事務局
9月15日 (金)	ベルリン	午前 午後 夜	自主研修 日独合宿セミナー 班別ディスカッション 交流会
9月16日 (土)	ベルリン	午前 午後 夜	日独合宿セミナー 班別ディスカッション 団ミーティング 交流会
9月17日 (日)	ベルリン	午前 午後	日独合宿セミナー 班別ディスカッション 全体会 団ミーティング
9月18日 (月)	ベルリン 及び ドレスデン	午前 午後 夜	自主研修 訪問：【U25】ベルリン・オンライン自殺予防 （ベルリン大司教管区カリタス連盟 25歳未満オンライン自殺予防・相談） ドレスデンへ移動 団ミーティング
9月19日 (火)	ドレスデン	午前 午後	ドレスデン旧市街見学 懇談：ザクセン州政府子ども・若者コミッショナー 自主研修、団ミーティング
9月20日 (水)	ドレスデン	午前 午後	訪問：民主主義と勇気ネットワーク（NDC）ドレスデン支部 訪問：ドレスデン市青少年消防団
9月21日 (木)	ドレスデン	午前 午後	訪問：ドレスデン工科大学政治学研究所 懇談：ドレスデン工科大学学生 自主研修、団ミーティング
9月22日 (金)	ドレスデン	午前 午後	訪問：ドレスデン・サポータープロジェクト 自主研修、団ミーティング
9月23日 (土)	ラーデボイル ドレスデン	午前 午後	訪問：マイセン郡青少年フォーラム 団ミーティング、学習成果発表会準備
9月24日 (日)	ドレスデン	午前 午後	自主研修、団ミーティング 学習成果発表会 歓送交流会
9月25日 (月)	ドレスデン	午前	ドレスデン空港 発
9月26日 (火)	東京	午前	羽田空港 着

### 3. ダイジェスト

#### 7月29日 事前研修

オンライン上ではあるが、団員同士の初顔合わせの場となった。まず、主催者挨拶や事業詳細に関する説明があった。

午前には、第2ドイツテレビプロデューサーのマライ・メントライン氏より「ドイツを知る」をテーマに講義を受け、ドイツの基礎情報を学んだ。午後には、国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センターの大山氏より、「日本における若者の社会参画」をテーマに講義を受け、社会参画に対する考えや想いを深めた。

その後は、過年度参加者から体験談を聞き、団ミーティングにて係決め等を行った。

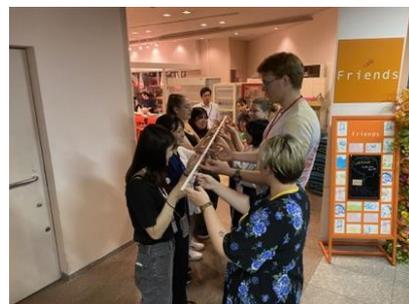


#### 9月1日～3日 合宿セミナー

○9月1日（金）：合宿セミナー1日目

ドイツ団との顔合わせ後、若者の社会参画について、団員全員で合同ディスカッションを始めた。ボランティア活動を始めたきっかけの共有や、社会参画とは何かなどについて意見交換を行った。

夜には夕食歓迎会にて、ドイツ団とともに夕食をとった。ドイツ団による出し物の踊りを一緒に踊ったり、ゲームをしたりして交流を深めた。



○9月2日（土）：合宿セミナー2日目

午前には、日本団・ドイツ団混合で班に分かれ周辺フィールドワークを行った。英語でコミュニケーションを取りながら、各自散策や会話を楽しんだ。

午後には、前日に引き続き全体で合同ディスカッションを行った。ボランティア活動におけるやりがいというテーマから議論が始まり、各自のボランティア活動における課題共有やその解決方法、ボランティアをする中での失敗の捉え方に話題が広がった。



○9月3日（日）：合宿セミナー3日目

昨日に引き続き、合同ディスカッションを行った。政治、デモなどのテーマについて議論が行われた。最後には、若者の社会参画について気づいたこと、今後してみたい・学んでみたいこと、という観点から、全員が個人発表を行った。



## 9月12日～25日 ドイツ派遣

○9月12日（火）：出国・散策

11日の夜に羽田空港を出発し、フランクフルト空港で乗り継ぎ、ベルリン・ブランデンブルク国際空港に到着。その後、ホテルに向かいホテル周辺の散策を行った。



○9月13日（水）：ベルリン日独センター訪問・講義

ベルリン日独センターで、ザクセン州青少年連合事務局長のヴェンケ氏をはじめとする3名の方から講義を受けた。「青少年の参画」や「ドイツの青少年育成活動概要」について学んだ。ワークショップでは、そもそも参画とは何か、どのような方法があるのか、自分たちの身近で振り返ることを行い、各々の社会参画を考える時間となった。



○9月14日（木）：BUNDjugend(ブント・ユーゲント)訪問・ベルリン市内歴史研修

午前中はベルリン市内歴史研修があり、「ナチス時代、東西ドイツの分断とベルリンの壁、ドイツ統一に至るまでの歴史」をテーマに学んだ。バスでそれぞれの象徴の場所を訪問し、ハーヤー氏より説明を受けた。ナチスによる安楽死計画によって殺害された犠牲者の慰霊碑とその展示、ベルリンの壁、またその壁を乗り越えようとして命を落とした方々の顔写真と名前が刻まれた慰霊碑などを巡った。安楽死計画に関する説明で、加害者側も全員が殺害することを望んでいた訳ではないということを知った。現地で歴史を知ることによって、何があったのか深く考えることができた。また慰霊碑として残すことは、過去に向き合うためにも必要だと学び、自分たちも現実を知り、歴史と向き合うことの大切さを実感した。

午後からは、ブント・ユージェント(ドイツ環境自然保護連盟青年部)という環境保護・自然保護団体を訪問した。ブント・ユージェントは27歳以下の方々に構成されており、政治に考え方を要求するだけでなく、自分たちの足元から変えていこうとする考え方の団体である。その中で、住みやすい町のためにデモやキャンプ、広報活動を行っていることを学んだ。



○9月15日(金): 自主研修・日独合宿セミナー1日目

午前中は、ベルリン市内で自主研修を行った。

午後から研修交流センターに移動し、ドイツ団員と再会した。夕方から交流会を行い、その中では参加者の紹介やアイスブレイク、ディスカッションの顔合わせと自己紹介が行われた。ドイツ団員との久々の再会を果たし、ゲームを通して楽しんだ。



○9月16日（土）：日独合宿セミナー2日目

1日を通して班別ディスカッションが行われ、取り上げるテーマややり方についてはグループごとにグループの色が出ていた。大きなテーマとして「若者の社会参画に対する思い」があげられていたが、その中でデモや政治参加について深く議論された。日本とドイツの違いを感じ、異文化を理解するとともに各々の意見から活発な意見交換ができた。

夕方に行われた交流会では、日本団とドイツ団の両方からゲームを用意した。日本団は日本の応援や紙飛行機づくり、だるまさんがころんだ、ドイツ団は人間知恵の輪やグループ対抗の協力ゲームを一緒に行った。それぞれ、言語の壁を越え楽しんで参加していた。



○9月17日（日）：日独合宿セミナー3日目

朝にラジオ体操をドイツ団と一緒にいった。その後、前日に引き続き「若者の社会参画に対する思い」についてドイツ団との最後の班別ディスカッションを行った。また、ドイツ団は日本の、日本団はドイツの日常生活で不思議に思ったこと、驚いたことなどを共有し合った。異国の地に行くからこそ、気づく点も多々あり、文化の違いを学ぶことができた。

午後からは全体会として、ファシリテーターの方が今までのディスカッションをまとめ、2つのグループの共有を行った。どちらも若者の社会参画についてディスカッションするも、掘り下げた内容は異なるため2グループとも有意義なディスカッションができていた。ドイツ団との最後の時間を惜しみながらお別れをした。



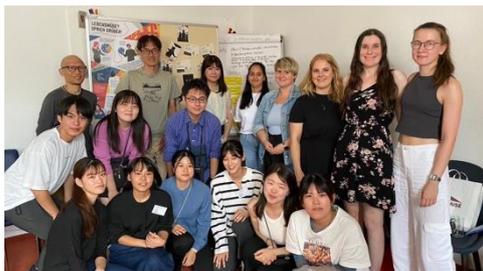
○9月18日（月）：自主研修・[U25]ベルリン・オンライン自殺予防訪問・ドレスデン移動

午前中は自主研修を行い、最後のベルリンを各々楽しんだ。

午後からは、25歳未満の青少年を対象としたオンライン自殺予防・相談を行っている[U25]

という団体を訪問した。ドイツにおける自殺の現状、自殺行為への発展の仕方を学び、そこにどのようにアプローチをしてサポートしているのかを知ることができた。ピアカウンセラーの話の中でメンタルケアがキーワードとして出てきて、話を聞くことだけではなく、自分自身のケアも大切であると学んだ。この[U25]の活動には今年度のドイツ団員もいて、再会することができた。

その後バスでドレスデンへ移動した。



#### ○9月19日（火）：ドレスデン旧市街見学

##### ザクセン州政府子ども・若者コミッショナー訪問

午前には、ドレスデン旧市街をガイドの斎藤雅子氏に案内していただいた。歴史をふまえた丁寧なガイドをしていただき、その後のドレスデンでの滞在で活かせる知識を多く得ることができた。

午後には、ザクセン州政府子ども・若者コミッショナー事務局を訪問し、コミッショナーを務めるスザン・リュートリヒ氏から子ども・若者の社会参画促進のための取り組みについてお話を伺った。子ども・若者の参画は彼/彼女らが持つ権利であることや、実際に子ども・若者の意見を聞き、その意見を社会に反映させていくことの大切さを学んだ。



#### ○9月20日（水）：民主主義と勇気ネットワーク、ドレスデン市青少年消防団訪問

午前には、市民が偏見や先入観に立ち向かい、差別が起きたときに逃げない勇気を持たせる手助けのためのプロジェクトを運営している民主主義と勇気ネットワーク（NDC）ドレスデン支部を訪問した。団体に関する説明の後、プロジェクトの一部として実施されているワークショップを2つ体験した。民主主義について考えるワークショップでは、人と話すこと、そ

の議論をシェアすることで、私たちの社会がどのように進歩してきたか、もしくは進歩せずにどれだけ差別が残っているのかを認識することができた。

午後には、ドレスデン市青少年消防団を訪問した。地域に根ざした若者による社会貢献活動のひとつとして青少年消防団はその地域において大きな役割を果たしており、それが全員ボランティアによって運営されていることを学んだ。青少年消防団に関する説明の後、子どもたちによる消防訓練を見学・体験したり、チームワークを育むゲーム対決をしたりして交流を楽しんだ。



#### ○9月21日（木）：ドレスデン工科大学政治学研究所訪問

朝から、ドイツ団団長のシュテファン・ブロイアー氏が所属するドレスデン工科大学政治学研究所を訪問した。政治教育におけるオンラインゲームという観点から、実際にオンラインゲームをプレイし、その後のディスカッションを通じて、ゲームの政治性について気づきを得た。また有名なオンラインゲームを例に、ゲーム内に組み込まれている社会的規範や権力構造に着目し、ゲームの消費が無意識のうちに大衆のステレオタイプを強化することがあると学んだ。

その後、ドレスデン工科大学の環境団体メンバーにキャンパスツアーをしていただき、環境や自分たちボランティアの話題で意見交換をして交流を楽しんだ。



○9月22日（金）：ドレスデン・サポータープロジェクト訪問

午前、ディナモドレスデンのホームスタジアムを訪れ、ドレスデン・サポータープロジェクトについて理事長のイエンス・ヴェッツェル氏からお話を伺った。サッカーという一見政治とは関係のないと思われるスポーツの場において、サポーター内に民主主義的価値観を広げていくための活動が行われていることを知った。また、そのための具体的な取り組みや、その中での難しさなどについても学んだ。

午後には自主研修の後、学習成果発表会の準備を行った。



○9月23日（土）：マイセン郡青少年フォーラム訪問

朝からドレスデン郊外へ移動し、マイセン郡青少年フォーラムを訪問した。実地見学旅行や政治家との交流イベントなど企画の実施に加え、他団体プロジェクトへの資金援助機関として青少年ボランティア自身がその審査を行っている団体である。青年ボランティアとボランティア活動について意見交換したり、民主主義的価値観という言葉の意味について議論したりして、活動最終日にふさわしい締めくくりとなった。

ホテルへ移動後は、明日の学習成果発表会に向けた準備を行った。



○9月24日（日）：学習成果発表会、歓送会

①若者の社会参画について何を学んだか、②日本とドイツの比較、③派遣で学んだことを今後のボランティア活動でどのように活かすか、という3点から学習成果発表を行った。その後、歓送会に参加し、ヴェンケ氏らとともにドイツ滞在最後の夜を過ごした。



○9月25日（月）：帰国

ドレスデン空港からフランクフルト空港を経由して、羽田空港へ。

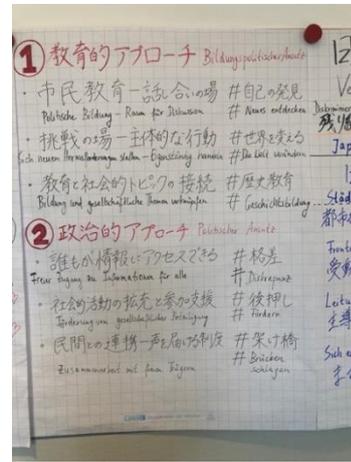
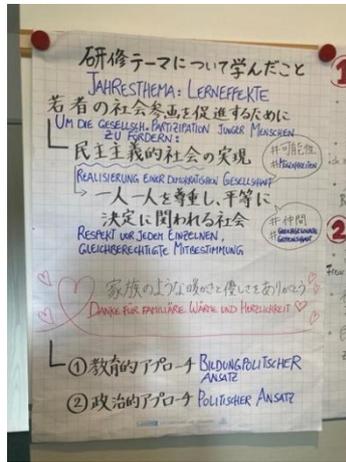


#### 4. 学習成果発表会

私たちは日独学生青年リーダー交流事業に参加し、「若者の社会参画」というテーマで研修を行った。自らの力を信じ、社会に対してアクションを続けているドイツの若者との交流は、私たちにとって大きな刺激であった。学習成果発表会ではそのまとめとして、(1)研修テーマについて学んだこと(2)日本とドイツを比較して気づいたこと(3)自らのボランティアとのつながりという三つのテーマでプレゼンテーションを行った。



(1) 研修テーマについて学んだこと ー若者の社会参画を促進するためにー



若者の社会参画を促進するためには何が必要なのか。私たちがドイツでの研修を経て出した答えは「民主主義的社会的社会」つまり、一人ひとりが尊重され、平等に決定に関われる社会の実現である。若者がいくら社会に参画しようとしても、それを育てる土壌がなければ芽は出ない。だからこそ、社会はその土壌として若者と共にあるべきなのだ。では、そのような社会を実現するにはどうしたらよいのだろう。ここではその方法として、①教育的アプローチ②政治的アプローチの二つを考えた。それぞれ三つのポイントを示しながら概観してみたい。

## ① 教育的アプローチ

### ア. 市民教育 一話し合いの場づくりー

若者が主体的に社会と関わるにあたっては、他者の声を聞き、自らの声を伝える重要性を知る必要がある。教育現場で話し合いの場を設けることは、そういった民主主義の本質を肌で感じることにつながるだろう。またその過程では、自分が何に悲しみ何に喜ぶかなど、自分の価値観も知ることとなる。これは社会に参画する上で自分にできることを発見する契機ともなりうるだろう。

### イ. 挑戦の場の創出

主体的に何かを生み出したり変えようとしたりといった経験を幼少期から積んでおくことには大きな意義がある。ドイツでは教育において、家庭・学校に続き青少年援助という第3の視点が重視されてきたという。実際に、スポーツやアート、ボランティアなど青少年の余暇活動が充実しているという現状がある。若者自らがその余暇活動に積極的であり、主体的な関わりを持っていることはドイツの特徴であろう。幼少期からの小さな積み重ねが「アクションをする人」を育てるのかもしれない。

### ウ. 教育内容と社会的トピックの接続

ここでの社会的トピックとは、環境問題・ジェンダー・歴史・人種差別など社会で議論されているテーマを指す。教育現場においてこのようなテーマを扱うことは社会への関心を高めるだろう。実際にドイツ団で行った合宿においては、日本とドイツの歴史教育の違いに刺激を受けた。ドイツでは第二次世界大戦についてディスカッションを通じて深く学ぶという。一つのテーマに対して自らの意見・立場に向き合う時間の必要性を感じた。

## ② 政治的アプローチ

ここでの政治的アプローチとは、制度を整えたり社会の仕組みづくりをしたりといった方法のことである。

### ア. 情報アクセスの均等

誰もが情報にアクセスできること、つまり、アクセスする機会が均等にあることの重要性を訴える。住んでいる地域や各々の家庭環境に関わらず、全ての若者が自らの持つ権利・自らが享受できるサービスについて知るべきだろう。インターネットの効率的な活用によって、若者の社会参画における格差を是正する道を模索してゆく。

### イ. 社会的活動の拡充と参加支援

ドイツにはボランティア休暇や自発的社会活動年など、若者の社会的活動を応援する仕組みが存在するという。金銭面の援助はもちろんのこと、社会に参画したい若者の受け

皿を設けることが必要不可欠だと学んだ。

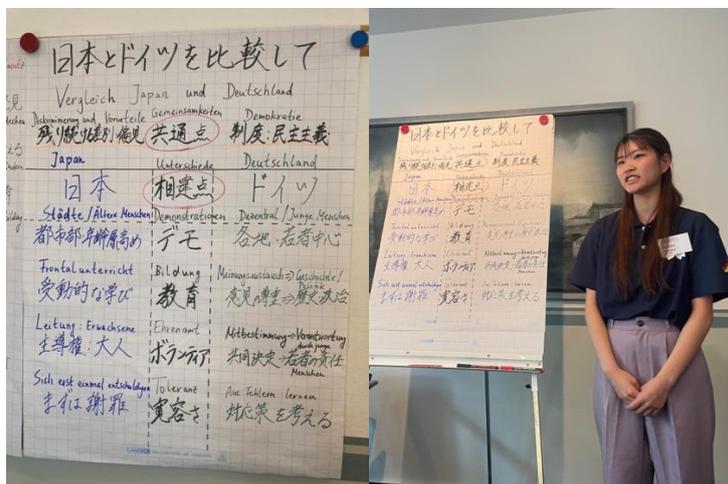
#### ウ. 民間と公との連携 一声を届ける制度—

若者の声を届けるにあたって、民間(実社会)と公(行政機関)が切り離されていないことの重要性を感じた。実際に『U-25 ベルリンオンライン自殺予防』では、金銭面の援助が不足しているが故に活動を拡大できない状況を知ったのだ。若者の社会参画を促進するためには、公との連携強化が必要だろう。

このテーマのまとめに

ドイツにおける多様な人々との出逢い、そして交流は、私たちにたくさんの優しさを与えてくれた。「民主主義的社会」つまり、一人ひとりが尊重され、平等に決定に関われる社会のあり方を教えてくれたのは紛れもなく、ドイツの仲間たちである。社会参画という言葉はどこか大袈裟に捉えられることが多いが、バックグラウンドの違う人のことを知りたいと思うこと、その人に声をかけて対話すること、その人と一緒に社会について考えることこそがまさに、社会参画における大きな一歩なのだろう。

#### (2) 日本とドイツを比較して気づいたこと —ドイツと日本の共通点、相違点—



#### 「共通点」

日本とドイツについての比較を伝えるために共通点と相違点に分けて考えた。

- ・ 共通点として、制度が民主主義で、一人一人の意見を尊重する考えがある。
- ・ しかしその中でドイツも日本も、程度の差はあるものの差別が今も根強く残っている現状が同じである。その例としてジェンダーに関わる男女差別、経済格差によって起こる差別等が挙げられる。

共通の問題意識があるものの、取り組みは国によって変わってくる。

## 「相違点」

### デモ：

日本では東京などの都市部で行われて、参加者は年齢層が高い傾向にある。

ドイツは、集中化せず各地に広がり、若者が中心となり行なっている。

デモは日本では抵抗があるというイメージがあるが、そうではなく気軽に声をあげる手段としてあるということを学んだ。

### 寛容さ：

・日本では、ミスをした際にすぐに謝罪をすることが自然と求められる

・ドイツでミスをした際に、対応策を考えるなど先を見た行動をしていることがドイツ団とのディスカッションを通して学んだ。

・ミスはネガティブな面として捉えられがちだが、一方で次の改善に向けたポジティブな面として考えている。

### 教育：

・日本ではただ机に座って授業を聞くという受動的学びが多くある。

ドイツでは個人の意見が尊重される環境が整っていて、学びが深まる。

例として歴史や政治の学びでは自分がその人の立場だったらどう思うか、どう行動するかを考え、過去の学びを生かしていることがわかった。

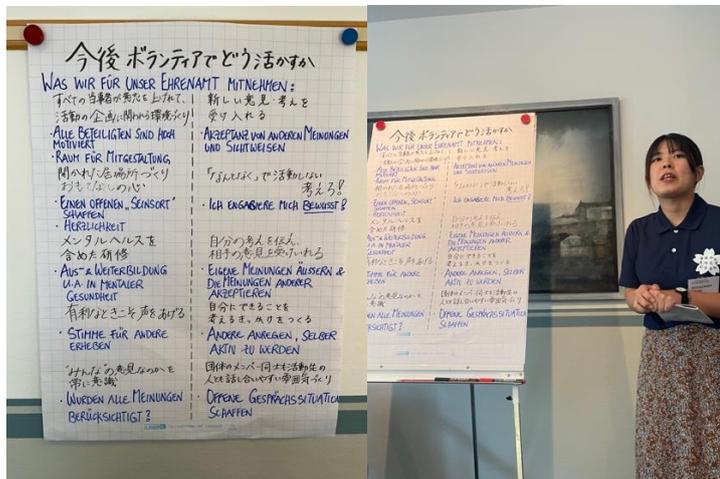
### ボランティア：

・日本では、若者が企画運営を行うこともあるが、最終的な主導権は大人が担っていることが多くある。

ドイツでは若者の決定権が認められており、大人のサポートはあるものの共同決定が行われている。

・自身で決定することで若者自身にも責任が生まれ、より良い社会参画につながる。

(3) 自らのボランティアとのつながりードイツでの学びをどう生かすかー



そして最後に、これらのたくさんの方の学びを、団員それぞれが行うボランティア活動にどう生かすかについて示し、まとめたい。以下は、今後の活動で生かしたいことを、団員が1人1つずつ挙げたものである。

- ・ 全ての当事者が意思を上げられて、活動の企画に関われる環境づくり
- ・ 開かれた居場所づくり おもてなしの心
- ・ メンタルヘルスを含めた研修
- ・ 有利な時こそ声をあげる
- ・ “みんな” の意見なのか常に意識
- ・ 新しい意見・考えを受け入れる
- ・ 「なんとなく」で活動しない 考えろ！
- ・ 自分の考えを伝え、相手の意見を受け入れる
- ・ 自分にできることを考えるきっかけをつくる
- ・ 団体のメンバー同士も活動先の人とも話し合いやすい雰囲気づくり

まず、多く挙げられたのは、意思決定の場に関する内容だ。

この交流事業を通して私たちは、若者の社会参画のためには、民主主義的社会の実現が重要であると学んだ。民主主義的社会とは、一人一人を尊重し、平等に意思決定に関わることのできる社会であると考えている。

ボランティア活動を行ったり、団体を運営したりしていく中では、話し合いの機会も多くある。その際に意識したいのは、活動に関わる全ての人が議論の場に参加できているかとい

うことだ。そして、その一人一人が自分の考えを伝え合い、互いに受け入れ合えるような場を作っていきたいと思う。

特に、自分が意見を表明しやすい有利な立場にある時こそ、全員の意見が平等に尊重されるよう、積極的に声をあげるようにしたい。

第二に、受動的に「なんとなく」で活動するのではなく、考えて能動的に活動することの大切さも実感した。さらに、交流事業の中では、民主主義的価値観を実行に移す方法として、主体的に行動しているたくさんの方々に出会うことができた。自分の行うボランティア活動を通して、日本にも、このような主体的に行動する人、挑戦する人を増やしていきたいと感じている。

第三に、ドイツは若者がボランティア活動をしやすい社会であるという印象も受けた。具体的には、ボランティア活動をする側に対しての研修や、メンタルヘルスのケアをする取り組みを日頃の活動にも取り入れていきたい。

そして、私たち日本団をあたたかく迎え入れてくれたドイツの方々の「おもてなしの心」も、これから真似していきたい点の一つである。この嬉しさと感謝を忘れず、私たちがもてなす側になった時にも、ドイツで出会った皆さんのような心遣いができるようにしたいと思う。

以上、本交流事業では、本当にたくさんの学びを得ることができた。私たちはこれから、この学びを実践していくとともに、自分の身の周りの人や所属団体のメンバー、さらにその周囲の人々へと社会参画の輪を広げていきたい。

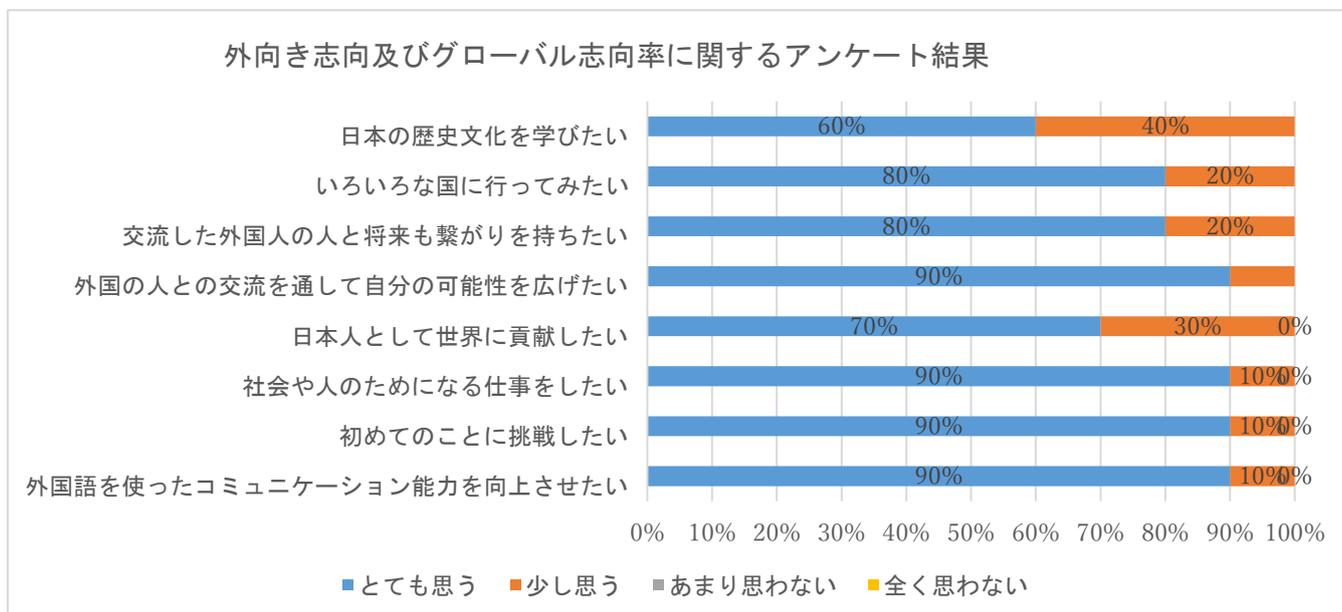
## 5. 参加者アンケート

### (1) 事業全体の満足度



「事業全体の満足度」に対する回答は、派遣者10名全員から「満足」という回答を得ることができた。

### (2) 外向き志向率、グローバル人材率



#### 【外向き志向とは】

文部科学省の定めた調査項目3項目「日本人として世界に貢献したいと思いますか」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか」「交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたいと思いますか」の結果を集計したものである。当機構では、それらの問いに対して肯定的な回答の合計が80%以上を得ることを目標とし国際交流事業を行っている。

#### 【グローバル人材志向率の分析】

当機構では、上記の外向き志向調査に加え、独自に語学力・コミュニケーション能力及び異文化に対する理解と日本人のアイデンティティ等を加えた8項目のアンケートを作成し、「グローバル人材志向率」として、平均80%以上の肯定的な回答を得ることを目標に事業を実施している。本事業においては、肯定的な回答が100%となっている。

## ■氏名：井上 紗彩

■所属団体：NPO 法人しずおか共育ネット

■活動内容：高校生が個性と能力を発揮できる社会の実現を目指し、静岡で探究活動のサポートや居場所づくりなどを行う。

## ■ドイツで学習したこと

## 「若者の社会参画について」

私はこれまで「若者の社会参画」という言葉を政治的意味合いにばかり結びつけていた。しかし、ドイツで出逢ったたくさんの友人、そしてドイツで過ごしたたくさんの時間が、社会参画についての新しい考えを与えてくれた。特に、ドイツの若者が家庭や学校、青少年団体など多様な場所で、社会への考えを交換している姿はとても印象的であった。自らの声を持つ可能性を信じ、人々と主体的に繋がろうとする姿は「若者の社会参画」そのものだと気づいたのである。私たちも実際に経験したように、バックグラウンドが異なる人のことを知りたいと思うこと、その人に話しかけて対話すること、その人と社会を創ろうとすることこそがまさに、社会に関わるということなのだ。私たちはその過程で自分を知り、社会における自分の役割を発見することとなるだろう。身近なところから「社会参画」の輪を広げてゆくことで、社会は少しずつ変わりゆくのだと思う。

## ■ドイツでの学習をどのように活かしたか

ドイツでの学びは意識、行動という両面で私に大きな変化を与えてくれた。その変化を活かし、私が帰国後実践したことは主に3つある。

1つ目は、自らの当たり前を疑うということだ。私は高校時代から偏差値至上主義的な日本の教育に違和感を覚えており、新しい教育の在り方について探究を続けていた。しかし、ドイツの仲間とディスカッションをする中で、自分自身も自分の受けてきた教育に囚われていることに気づいたのである。ドイツの実践として半日教育や余暇活動の存在を知ったが、それは若者の時間に「余白」をもたらし、自由な選択肢を与える教育的価値観だと感じた。私はこれまで新しい教育を「増やす」ことが若者のためになると考えていたが、古い教育を「減らす」ことも1つの手段なのかもしれない。当たり前を疑い、自らが普通だと決めつけていることに気づくというのが社会をよりよくする鍵なのだろう。

2つ目は、若者が「今」持っているニーズにアンテナを張るということだ。ザクセン州の子ども若者コミッショナーでは、子どもと若者は「今」彼ら特有のニーズを有していることを学んだ。私はボランティア活動で高校生と関わることが多いが、これまでは高校生が選ぶ次の進路、生きる次の未来に着目していたように思う。10代の若者が「今」何を求めているのかを知ることは、等身大の彼らの眼差しを通して社会を見ることである。そのことに気づいたからこそ、高校生と対話するときには、「今」のリアルな思いを聞き出せるように心がけるようになった。

3つ目は、ドイツでの学びを発信することで社会参画のハードルを下げるということだ。私自身、今回の研修で最も印象的だったのは、ドイツの若者が自分らしい「社会参画」をしていることであった。それは単に政治の場だけでなく、家庭や学校、青少年団体といった多様な場で目にした光景だ。u-25 オンライン自殺予防でも学んだように、「自分は価値のあることができる」と信じ、自分の一歩が社会を変えうることを自覚することが重要だ。そして、私の役割は、ドイツで得たこの価値観を日本の若者に伝えることである。実際私は、自らが通う大学のドイツ語の授業にて報告会を実施し、同世代の若者と社会参画について考えた。そこではやはり、日本の若者が「自分の力では社会を変えられない」と感じていることが問題として挙がった。若者の意識をすぐに変化させることは難しいが、地道に伝え続けることの意義はあると改めて思った。社会に参画する第一歩は、自分を知り、背景の異なる相手を知ることだ。発信することを通じて、私自身も社会の人々と繋がりを続けていきたい。

## ■今度行いたいこと

今後は映像を通じて、更に多くの人にドイツでの学びを発信したいと考えている。ディスカッションの様子やボランティア団体との交流はもちろんのこと、ドイツの街に残る戦争の記憶や文化についても伝えたい。映像を用いることで、より鮮明に、より生き生きとドイツの「今」を伝えることができるだろう。SNSを活用した多方面への発信に挑戦しようと思う。

■氏名：小笹 倫子

■所属団体：大阪航空少年団

■活動内容：航空に興味がある小中高生に航空について学ぶ・体験する機会を提供すると共に、団体でのあり方を学ばせる。

### ■ドイツで学習したこと

#### 「若者の社会参画について」

特に大きく2つのことを学んだ。1つ目は、若者が自分たちの意思で何かを変えられるという実感を持つことの重要性である。日本では、自分で社会を変えられるという考えを持っている人が少ないという現状に気づいた。そしてそれは、学校生活や家庭においてテーマについて自分で考えそれを述べる、自由に話し合うという経験の少なさ、つまり参画の少なさが一因となっているということがドイツ団との議論で分かった。幼いころから参画に関わる経験を積むことが必要であると学んだ。2つ目はメンタルヘルスの重要性である。失敗することや自分1人ではどうにもならないことに対し、事前に抱え込み過ぎないようボランティアスタッフ内で働きかけている点が印象に残った。社会に参画できる構造を創ることも大切であるが、まず自分の意思を述べることや取り組むことへの障壁・不安をなくすことが、何かを変えようとするうえで大切であると気づいた。

### ■ドイツでの学習をどのように生かしたか。

まず私自身では、失敗やメンタルヘルスに対する考え方や自分の気持ちを表現することの大切さを学んだことから、失敗しても前向きな考え方になることができ、自分自身の気持ちの面で、新しい取り組みへの挑戦をしやすくなった。そして、自分の気持ちや考えたことを前よりも臆さずに伝えることができるようになった。ボランティアや所属しているサークル活動などの制度において、今まで自分が思っていたが発言しなかったことを目上の人に対しても話せるようになった。正しい・正しくないに関わらず意見は平等に発言でき取り扱われる権利があり、言わないとそこに問題があることに気づけないということドイツの研修で学べた結果だと思う。また、失敗に対する不安が減少したため、最初はどうもいかなくてもその都度改善していけばよいということに気づき、新しい取り組みをはじめることへのハードルが下がった。実際に、自分の気持ちや変えるべき点と伝える、話を聞き共に考えてくれる人もいれば、鼻から聞き入れてくれない人もいたが、両者の対応を経験できたのもよい経験になったと思う。

また、意思を伝える側だけでなく、伝えられる側としての意識が変わった点も、今回の研修で得られた大きな成果だった。私は小学生から高校生までの子どもと一緒に様々な活動をしているが、そこで自分自身、子どもの意見を無意識のうちに軽んじている部分があったことに気づけた。子どもたちは一緒に活動している当事者であるのに、活動内容は毎回スタッフが企画し、毎回の活動の反省や活動に対する意見などもスタッフ内だけで話し合い・共有していなかった。ドイツ団のツィリル氏が「子どもたちは正直だから、活動が楽しくないと来なくなる」という発言をしていたのがとても印象に残っている。参加する子どもが減少している悩みを抱えていたので、その原因の1つとして子どもたちのニーズや気持ちに配慮できていなかったのだろうと感じた。それに気づいたことから、当事者である子どもの意見を取り入れるとともに、参画の経験を積むため、子どもたち自身で活動を考えられる取り組みを進めている。現時点では、活動に対する評価や感想、やりたい活動についてのアンケートを1月から始める予定である。加えて、子どもたち自身でやりたいことを相談し活動内容を決めてもらう「子ども会議」のようなものに1月に取り組む予定である。そして、スタッフがすべて指示するのではなく、適度に自由を与えて自分たちで考えて動いてもらい、見守る時間を増やすことになった。1人1人が意思表示しなければ何も変わらないし決まらないということ学び、主体性を持って参画することの大切さを学んでもらえるような取り組みにしたい。

### ■今度行いたいこと

#### 1. スタッフ内におけるメンタルヘルス

最初にスタッフになる際簡単な講習があるが、その講習内で失敗を恐れず挑戦していいということや、心理的安全性の重要性についての話を加えたい。私の所属するボランティアの場合だと、子どもへの接し方を学ぶ機会があれば嬉しいと考えていたのでそのような仕組みも整えていきたい。

#### 2. 子どもの参画の機会をより増やしたい。

子ども会議に加え、子どもたちの自由に任せる時間を増やす。

■氏名：加藤 徳子

■所属団体：公益社団法人 上越国際交流協会

■活動内容：交流イベントや日本語教室など、国際交流や国際理解を基盤とした活動、外国人住民の方への支援活動

### ■ドイツで学習したこと

#### 「若者の社会参画について」

ドイツで学習したことの中でも、特にデモと政治教育に対する学びが自分の中で大きい。

私は今まで、デモに対してあまりプラスのイメージをもっておらず、自分にはあまりつながりのないもののように感じていた。しかし、デモが投票権のない人の声を届ける場でもあり、自分の意見を周りに表明することができるものだという言葉を聞き、認識が大きく変わった。この「自分たちの意見を表明し、届ける」という意思こそが、社会参画には必要不可欠になるのではないかと今では感じている。

また、政治教育のゴールは選挙ではなく、人間形成のためであるという考え方を学んだ。政治教育を通して生徒が自分の関心を見つけ、行動することが大切であるという言葉から、日本の政治教育との目的の違いを感じた。日本でもこのような捉え方が浸透し、教育課程の中に取り入れられていくことで、子どもたちの社会参画に対する意識が大きく変わっていくのではないかと考える。

#### ■ドイツでの学習をどのように活かしたか

大学でも社会参画に関連する講義を受講し、社会参画と教育の関連性、社会的な包摂と排除の原理などについて学んでいる。講義内では、社会から包摂、または排除される対象について国の歴史や社会背景をもとに考えたり、社会参画と教育がどのようにつながっているのを見直したりするなど、「社会への参加」をテーマに議論することが多い。ヨーロッパの社会参画について議論をする機会もあり、そこで私は、ドイツで学んだ社会参画の意識について話すことができた。講義に対し、私はドイツでの学習を活かし、より深める場となっていること、ドイツでの学びを自分に引き寄せ、より自分事として捉えながら参加することができていると感じている。社会参画というテーマが自分の中でも広がり、自分の関心のあった学校教育につなげてさらに深めていくことができていく。

また、現在実習をさせていただいている上越市の小学校で、外国語の授業の時間にドイツで学んだことを発表させていただく機会をいただいた。小学5年生に向けて、ドイツの歴史や文化、小学校の教育システムなどに焦点を当てて紹介した。この小学校には外国にルーツのある児童も多く在籍しており、異文化交流の場を増やし、異文化への興味関心を高めることが課題として先生方から挙げられている。発表中、児童たちも積極的に発言してくれ、発表後は多くの質問をしてくれた。異文化への興味を引き出し、関心を高めるきっかけの一つを作ることができたように感じる。

事業でのディスカッションの中では、政治に関わる話題が常に出ていた。その中で、自分は日本の政治についてあまり知らないこと、今まで関心を向けていなかったこと、なぜそうだったのかを考えさせられることが多くあった。若者が社会に参画していくには、政治や社会問題などに関心をもつためのきっかけだけでなく、自分たちの意見に耳を傾けてくれると感じられる社会であることが必要だと感じる。私自身はまず知るところから始めなければならないと意識を変えられ、帰国後、自分の関心や問題意識のあることに力を入れて取り組んでいる政党はどこか、各政党はどのような政策を掲げているのかを調べるようになった。また、関心のある分野において今問題視されているのはどのようなことかについて、現状を調べたり、当事者に話を聞いたりしている。それによって、以前よりも現状の課題に問題意識や疑問を強く抱くようになった。その解決のために、自分はどのような行動ができるのか、何を変えればその問題は解決の方向へ動くのかを考えるようになり、自分の今の行動が社会参画のための一歩になることを感じている。

#### ■今度行いたいこと

若者の社会参画と教育について学び続け、社会参画に対する意識を変えていくことをねらいとした授業を構想し、小・中学生に向けて実践したいと考える。

また、「みんな」の中に、取りこぼしている人はいないか」という、ドイツで出会った心に残る言葉がある。今自分が聞いているのは本当に「みんな」の声なのか、取りこぼすことがないように、自分はどう動くべきかを常に考えてボランティアなどの活動に取り組んでいきたい。

■氏名：川添 由貴

■所属団体：一般社団法人 NO YOUTH NO JAPAN

■活動内容：若者の政治参加が身近になることを目指した、SNS 上での情報発信やアドボカシー活動

### ■ドイツで学習したこと

#### 「若者の社会参画について」

ドイツには、社会参画しやすい環境があることを学んだ。ボランティア団体においては、参加前に十分な研修期間が設けられていることが多く、スキルや知識を身につけた上で活動に参加できる環境が整備されていた。また、社会への意見表明の方法としてデモが身近に存在していることも実感した。実際に、ベルリン滞在中には環境保護団体 Fridays for Future 主催の 24,000 人が参加したデモ行進があった。

加えて、「民主主義的価値観」という言葉が多く訪問先で上がっていたことが印象的であった。この言葉をより具体化させるため、民主主義的価値観とは何を指すのか質問をしたところ、キーワードとして寛容性、平等性、公平性、異なる意見を尊重し合うこと、というような答えが返ってきた。この回答から、よりよい社会のために必要なこととして「民主主義的価値観の普及」が市民の中での共通認識になっているのではないかと感じた。

### ■ドイツでの学習をどのように活かしたか。

所属団体においては、Instagram を通した情報発信により精力的に取り組むようになった。

これは社会参画をするための第一歩として、自分が関心のある分野について知識を獲得することが必要だと感じたためである。実際に私がドイツで出会った人たちは、彼・彼女らが活動する分野について、今どんな問題が存在するのか、問題の背景には何があるのか、問題解決のためには何が必要かが自分の中でしっかりと言語化されており、私たちにもわかりやすいように説明してくれた。彼・彼女らが活動する分野に関して興味を持つきっかけとなったのは、ドイツの政治教育に一因があったのではないかと考える。政治教育の目的は生徒が興味・関心のある分野を見つけ、それに対して行動できるようになることであり、選挙のための準備だけではなく、政治や社会へ興味を持つきっかけや政治参加へのモチベーション作りに寄与できる場所に政治教育の意義があるという。政治教育を受けたことが、彼・彼女らの現在の社会参画につながったのではないかと。そう考えると、政治教育の重要性というものがより大きく思える。

これまでに私が所属団体でやってきた Instagram を通した社会問題についての情報発信は、ドイツで彼・彼女らが受けてきた政治教育とつながる部分があると考えられる。所属する団体の情報発信においては、社会問題をわかりやすく発信することで、投稿を見た人が政治や社会へ興味を持つためのきっかけ作りに貢献することを目指している。社会参画のためには、まずは社会について知り、その上で自分の中での意見を持ち、それを行動に移していくことが必要であると考えられるため、所属団体での情報発信活動により精力的に取り組むことで、社会について知るきっかけ作りに邁進し、日本において社会参画する人を増やすことに貢献していきたい。

また、社会参画しやすい・続けやすい環境整備として、ドイツでは多くのボランティア団体において充実した研修が設けられていたことを受けて、団体内の所属チームにおいてマニュアル作りを始めようとしている。自分の身近なところからではあるが、まずは自分の所属団体から社会参画を続けやすい環境づくりを行いたい。

### ■今度行いたいこと

今後は所属団体での活動以外の方法でも社会参画としての政治参加に積極的に取り組みたい。まだやったことのないデモやスタンディングなどにも参加し、社会へ意見表明することで自分の周りから社会参画の輪を広げていきたい。また、今回の研修でドイツの政治教育に興味を持ったことから、政治教育について今まで以上に勉強し、団体での活動に活かしていけることはないかを考えたい。

■氏名：小田島 理月

■所属団体：東北大学 SCRUM

■活動内容：東日本大震災復興ボランティア団体として、震災を伝承するツアーや勉強会を行う。

### ■ドイツで学習したこと

#### 「若者の社会参画について」

最も印象的だった学びは、若者が参画できる社会にするためには、参画の難しさを、個人の責任として捉えるのではなく、社会の構造を変化させることとで解消していく視点を持つことが重要だということだ。団体の視察やドイツ団とのディスカッションを通し、政治、学校教育、多様性の尊重、ボランティア等のテーマを基に、社会について多角的に考えることができた。これらの学びの中で、社会課題は本当に一人一人の意識のみの問題なのか疑問に感じるようになった。すなわち、社会や政治に関心を持っていないことや、自己実現に向けた行動を起こすことができないことは、社会の仕組みや周囲の環境に課題が存在するという視点を新たに学ぶことができた。これは、知識や経験が乏しいために意思決定の場へ十分に参加できないことや、経済的状況によって受けられる教育や参加できるボランティアなどの社会的活動が制限されることなど、身近な社会の現状にも関連するものであると感じた。

### ■ドイツでの学習をどのように活かしたか

特に活かしたいと感じた点は2点ある。

#### 1. 議論しやすい場づくり

第1に、所属団体の活動や大学の授業等の議論の場で、参加しやすさや意見の出しやすさを向上させられるよう取り組んでいる。

ドイツ団とのディスカッションや民主主義と勇気ネットワークでのワークショップ等を通し、参加者が自分の意見を伝えられる状況を整えることの大切さを実感した。ファシリテーションの方法や、前の意見を踏まえたアイデアの提案、アイスブレイクや休憩の取り方も含めて、参考にしたい点が非常に多くあった。

この体験を基に、議論に参加する際には、参加者全員が自分の意見を臆することなく伝えられ、またその意見一つ一つが受け入れられるようにするにはどうしたら良いかを考え話し合いに臨むようにしている。具体的には、自己開示を率先して行うことで話しやすい雰囲気を醸成したり、他の参加者が出した意見の共感する点を話すようにしたりすることを心がけている。

また、今後中心となって話し合いを企画・運営したりする際には、参加者に合わせて意見の集め方を工夫したり、リラックスできるアイスブレイクや休憩を取り入れて行きたいとも感じている。

#### 2. 社会課題解決に向けた多様な組織の連携

第2に学んだことは、社会課題の解決は、国や行政機関、民間企業や団体、学生組織などの様々な組織が連携して取り組むことが大切であるという視点だ。

この研修に参加する前までは、行政期間が解決すべき課題、民間企業や団体によってのみ解決できる社会課題が個々に存在すると考え、自分が携わるボランティア活動が地域に与えられる影響にも限界を感じていた部分があった。

しかしドイツで、民間活動団体やボランティア団体だけでなく政治や制度についても学び、あらゆる社会課題に対してそれぞれの組織だからこそできることが存在すると知った。「若者の社会参画」というテーマにおいても、国や行政、民間の団体や企業ならではの関与の仕方が存在するように、私たち学生が取り組む強みもあることに気づくことができた。

この気づきから、自分が行うボランティア活動や大学で専攻している分野について、行政機関、民間団体それぞれが取り組んでいることを知る意識を持つようになった。そして、自分たちの活動だからこそできることを実行していきたいと考えている。

### ■今度行いたいこと

残りの大学生活では、自分のできることは何かを考え続けながら、周囲の人との話し合いや協力を大切に活動していきたいと思う。

また、社会人として働き始めた後も、何らかの形でボランティア活動を継続したい。ドイツで出会った方々の、自身の実現したいことに向けて行動する姿に感銘を受けた。私も、自分の意思や考えを持ち、社会に関わることを続けていきたいと強く思っている。

■氏名：手塚 颯一郎

■所属団体：青山学院大学法学部学生連合代表・「もしも」プロジェクト青学

■活動内容：「もしも」プロジェクト青学チームでは、渋谷で被災したらどう行動すべきかイベントの実施を通して幅広い年代の人たちに伝えている。

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」

合宿セミナーと訪独を通して、ドイツでは青少年のみならず大人も「若者の社会参画」に積極的に携わっているということ具体的に学び、「大人」も関わることの大切さを感じた。

実際に社会参画を実現するのは青少年だが、その環境づくりに大人も携わることにより市民が一体化して社会参画を行えるのではないかと考えた。日本の場合、たとえ社会参画への意識が高い青少年がいたとしてもそれを受け入れる社会ができていないように感じる。「余計なことに首を突っ込むな」、「子供は勉強だけしていればいい」、直接的に言わなくてもこう思っている大人がドイツに比べて日本は多いのではないだろうか。ドイツ人とのディスカッションを通して、大人も若者の社会参画を尊重しているからこそ、若者自身も積極的に活動に参加できるのではないかと考察した。

交流事業で学んだことや今の気持ちを忘れずに、皆が積極的に社会参画できるような環境を整えたいと強く思った。

■ドイツでの学習をどのように活かしたか

大学2年次より、法学部学生連合の代表を務めている。法学部の生徒会としての位置づけで、学部と学部生2,135人を繋ぐ役割を担っている。団体の歴史が浅いうえコロナ禍で大きな活動ができておらず、私が代表になった際は会員が3名しかいなかった。法学部生縦割り交流会や『法学部便り』の発行などやりたいことは数多くあったが、十分な会員数がおらず計画を断念せざるを得なかった。そのため、ドイツから帰国した後、まずは会員を集めることを第一の目標と定めた。

私が代表になった当時は、学生ポータルで会員募集の案内をしていたものの、数名しか応募者がおらず会員集めそのものに難儀した。そこで、私はそのときいた3名の会員を集めどのような手段で会員数を増やすべきか積極的に話し合いの場を設けた。これは、意思決定過程にメンバーを加えることの重要性をドイツで学んだからだ。ドイツのボランティア団体を支援する窓口の担当者と話した際、参画には「見せかけの参画」というものがあることを知った。「見せかけの参画」というのは、一見するとメンバーが会議に出席していて彼らの意見が反映されているように見えるが、実際には既に計画の骨子が決まっていて彼らの意見は全く反映されていないというものだ。その話を聞いたときに、「自分の団体会議を開いているが、もしかしたらそこも『見せかけの参画』になっているのではないかと耳が痛くなった。

そこで、今回は意識して会員が発言しやすく、そしてそれを基に会員間で議論できる会議とした。その結果、「学生ポータルやSNSのようなネット上ではなく、紙媒体でも案内を配布したらどうか」という案が出てきた。実際に、団体を紹介するビラを紙で配布したところ、ビラを見た学生10名から入会の応募が来た。紙媒体の方が実際に手に取って見てもらえるため、多くの学生に団体のことを知ってもらえたのだ。普段はデジタルの方が便利だと思いがちだが、紙媒体の方が実は広報効果があるということを知り意外に感じたとともに、意思決定過程にメンバーが参画できることの重要性を強く感じた。

この経験を忘れずに、これからも意思決定過程にメンバーが参画できるような環境を作っていきたいと思う。

■今度行いたいこと

私は現在大学3年生で、近いうちに社会に出ていくことになる。社会に出ると、今より世界が広がるように思う。特に仕事においては、たくさんの人々と一緒に過ごす時間が増えるだろう。そのなかで、自分と意見が合わない人とも接することがあるかもしれない。そのような相手であってもしっかり話し合いを重ねるとともに、意思決定過程においてその人の意見を尊重することを忘れずにいたい。

■氏名：中澤 彩乃

■所属団体：新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部ボランティアセンター「ぼらくと」

■活動内容：学生ボランティアコーディネーターとして、学内の学生に向けたボランティアの斡旋や自主企画の立案、運営

### ■ドイツで学習したこと

#### 「若者の社会参画について」

私は今回の若者の社会参画について学んだ中でも、特に“政治への参加”について印象に残っている。ドイツでは若者の政治参加へのハードルが低く、選挙に行くことだけが政治参加ではないと知り、選挙権の有無にかかわらず、選挙権がなくてもデモを通して自分の意思を伝えていることを知った。日本では、デモに対してあまり良いイメージを持たないが、ドイツでデモを見る機会があり、楽しそうに活動している姿に驚いた。活動を行っている当人たちが、自主的に動くことで社会は変えられるのではないかという思いの下、自分の意思を伝えられること、自分の意志で活動できることが、楽しそうな雰囲気につながっているのではないかと感じた。

また、ドイツでは、「当事者の立場」を考える機会が授業であることを知った。日本には、決められたものを行う傾向にあるため、ドイツのような考える場が学校で行われることで、社会参画へのハードルの低さにも繋がると考えた。

### ■ドイツでの学習をどのように活かしたか。

私は、ドイツでたくさん学んだ中から特に2つのことを意識して日々の所属する団体の活動に取り組んでいる。

1つ目は、自分の意見や思いを伝えたことである。ドイツでは、幼少期から家庭等で自分の意見を伝える場があることから、社会参画が身近なものだと感じた。自分が思ったことを伝える場があることや、考えを求められることから自分の意見を持つことが当たり前になり、社会参画が当たり前になると思った。比べて、日本は与えられたルールに則るのが当たり前であるため、意見を持つ機会が少なかったと感じた。私自身、今まで思ったことを言えない経験があり、それで物事がうまくいけば納得していることもあった。しかし、今回、「自分の意見を持つ」、「伝える」大切さを学んだため、意見がまとまっていなくても日々生活をしている中で、「自分はこう思う」を伝えることを心がけた。団体で企画をするときやボランティア活動に参加する際に、周りに任せることや指示を待つだけでなく、積極的に自分の意見を伝えるように変化したように感じる。そうしたことで、自分が主体的に関わることができると実感でき、物事に対する意識も変わっていった。また、自分が関心を持っていない分野の場合、無関心になってしまうことがあったが、それで終わるのではなく知識がなくても自分なりの意見を持つことを意識した。

2つ目は与えられたものが本当に正しいのか疑問を持つことである。ドイツでゲームを用いた政治教育について教えていただいた際に、与えられたものが本当に正しいのか疑問を持つこと学んだ。そのゲームを進めていくためには指示に従うしかなく、悪いことばかりを取り上げていかなければならず、結局社会が崩壊するものであった。時には、悪いことと知っておきながら取り上げてしまうこともあり、「それでいいのか」と聞かれたときにハッとした。悪いと思っていながらも変えようと思わない事実を考え直さないといけないと考えようになった。そこから、今与えられている環境が当たり前ではなく、1つ1つ「本当にそれでいいのか？」の姿勢を持って問うことで、当たり前前に気付くきっかけや当たり前になってはいけないことに気づくことができた。私は、高齢者施設での実習やアルバイト経験があり、その施設のやり方が正しいと思っていたが、優先順位を考えていく必要があると学び、疑問を持つようになった。「もっとこうした方がいいのではないか」、「これが当たり前になっていていいのか」と疑問を持ち、「どうしたらいいのか」と考えることを意識するようになった。また、物事の1面だけを見て判断するのではなく、多角的に見ることの大切さを実感し、これからも様々な視点から物事を考えていくことを意識していきたい。

### ■今度行いたいこと

私は、今回の研修を通じて、日々の出来事に疑問や意見を持ったり、深く考えられていなかったことに気づいた。そのため、物事を多角的に捉え、その上で自分なりの疑問や意見を持つことを意識するようになった。一度自分の中で考えて自分なりの答えを出していくために、様々な知識や経験を今後も積んでいきたい。

また、今回の貴重な経験を自分の知識にするだけでなく、自分の団体や若い世代に伝え、アクションを起こしていきたい。

■氏名：藤島 香緒里

■所属団体：宮城県大崎市鳴子国際交流協会

■活動内容：ドイツ人青少年のホームステイ受け入れやイベント支援を中心に国際的な交流を通して文化の違いや相手国について理解していくことを目的としたボランティア活動

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」

この事業を通して、ドイツと日本の社会参画の認識の違いを実感した。以前の私は、社会参画とは選挙に参加することなど政治に何かしらつながりのある活動だと考えていた。また、投票には18歳以上でなければ参加できないため社会参画が自分達のような子どもには関わりがないものだと感じていた。しかし、この事業に参加して社会参画についての認識が大きく変わった。ドイツも選挙権は18歳以上だが、デモが盛んなため18歳以下の人々も政治に対して自分の意見を示すことができる。また、ドイツではボランティア活動が盛んなため、子どもから大人まで気軽に社会参画ができる環境にある。ドイツ人でボランティア活動をしている人々は皆「自分は社会参画をしている」という認識で活動していると聞いたとき、日本も幼少期から社会参画についての認識をよりハードルの低いものにしていくべきだと感じた。

■ドイツでの学習をどのように活かしたか

ドイツで直接青少年達から聞いた意見を私から身近な人達に伝え理解してもらうこと、日本の社会参画と青少年の関わりに関する課題について自分で考えることに取り組んでいる。

まずは、ドイツで学んだことを自分の所属する団体に向けて発表することでドイツで得た知識や考えを身近な人達に伝えた。私の所属する団体には、小学生などの小さな子ども達も所属しているので、主に若い世代が海外に、特にドイツに行きたいと思えるような発表内容になるよう心掛けた。内容としては「合宿セミナー」「訪問した施設と活動内容」「歴史的建造物」「食べ物」の4つの項目に分けて発表した。どの内容も皆熱心に聞いてくれた。発表ではないが自分の身近な人である家族や学校の友人、先生方にも学んできたことを口頭で伝えたり、発表時に使用した資料を見せたり、現地で撮ってきた様々な写真を見せたりして私の意見を述べた。特に、デモについて興味を持ってくれた友人や先生が多いような印象を受けた。

また、日本の社会参画と青少年の関わりに関する課題に関して考えたことは、「子ども達がボランティアを身近に感じることができる環境づくり」についてである。ドレスデンにある少年消防団を訪れたときに、とても小さな子ども達が活動に参加していることに驚いた。子ども達のこのような活動を実現するためには、たくさんの協力が不可欠だということも学んだ。消防団員の協力はもちろんのこと、地域の人々からの理解、継続できる活動内容、一緒に活動する仲間が存在などがあるからこそ、大人になっても消防団に所属し続けることができたり、そこから新しい活動をしようという意欲を持てたりするのではないかと思う。しかし、日本の場合は、高校生向けにボランティアが募集されても、活動期間の短いものがほとんどで、長く続けられるようなボランティアは少ない。日本から参加した大学生メンバーに聞いてみたところ、大学でボランティアをやっている、就職したらやめようと思っているという学生が多いとのことだった。これらのことから、今後、私自身がボランティア活動を継続して、「ボランティアは楽しいということ」、「ボランティアは継続できるということ」を身をもって伝えていき、日本の若者にとってのボランティア活動をより身近なものにしていきたいという考えに至った。

これからを支えていく若者達には、積極的に社会参画をしてほしいと思う。しかし、「どうやって社会参画をしたら良いのか分からない」、「そもそも社会参画自体が何か分からない」、と思う若者も多いのではないかと思う。以前の私がそうだったからだ。そこを、社会参画について学んだ私達や、社会生活における先輩である大人達が、社会参画とは「楽しく・気軽」なものであることを伝えてサポートしていくべきではないかと思う。人々の認識というのはすぐに変わるものではない。私自身もこの貴重な経験を忘れずに粘り強く向き合っていきたいと思う。

■今度行いたいこと

現在所属している団体での活動を継続していきたい。そして、国際交流の良さを多くの人に知ってもらえるような活動をしていきたい。例えば、InstagramやTikTokの開設をして若者に活動について知ってもらうことを考えている。

また、これからもっと多くの国際交流をする中で、語学は必須となってくると思う。交流がスムーズに進められるように自分自身の語学力を高めたい。

他にも、社会参画について同世代の人々から話を聞いてみたり、できるのならばディスカッションという形で意見交換をしてみたいと考えている。

## ■氏名：前田遥夏

■所属団体：Peace Night Hiroshima

■活動内容：若者が主体となり、異なる言語で平和宣言文を作成、発信を行い広島から世界へ平和の大切さを伝える活動。

## ■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」

全体を通して、ドイツと日本における若者の社会に対する関心度の違いを強く感じた。日本では若者が政治やデモ活動に関心を持つ人が低い傾向にある。一方ドイツでは、その関心は高く実際デモ活動や政治に対して何かしらの活動を行う若者が多い。この差の原因をドイツ団とのディスカッションで見ることができた。それは教育の違いである。日本の教育システムは、受動的で若者が自ら考え発言をする場が整っていない。実際、日独メンバーディスカッションの場での発言数の違いが見受けられた。ドイツの教育システムは物事を自分事として考え、自分だったらどのような行動をとるのか、またそれぞれの意見に対しての尊重、受け入れる環境が整備されている。自分事として社会の様々な課題を捉えることは、より深刻に物事を考えることができる。この教育の違いがこれからの若者の社会参画における重要な要であると示唆することができる。

## ■ドイツでの学習をどのように活かしたか

まず、ドイツ団との交流を通して、若者が積極的に活動を始めることも大切だが、その後持続させることが最も重要だと教わった。意見を言い合え、共有できる環境づくりが必要だと学んだ。そのため、自分の属する団体ではもう一度進行方針を考え直す時間を設けた。またグループワーク後は全員が人前で意見や学んだことを言う時間を設け、担当者が毎回発表するといった係制をなくした。個人の変化としては、自身が意見を持ち、物事を他人事ではなく自分事として考えるよう心掛けている。ベルリンでのベルリンの壁、ユダヤ人慰霊碑を視察や現地の人との意見交換から国民が過去の歴史を忘れずに向き合っている様子がうかがえた。広島原爆の歴史もすべての人が知っておくべきことであり自身の活動に対してより新しいアクションを起こす必要性を強く感じた。所属する平和団体でユダヤ教とナチスについて学ぶ時間を設け、広島原爆との共通点、これから私たちが行うべきことについて共有した。また、過去を学ぶ際に一方の視点のみにとらわれず、各国の異なる視点から見ることの大切さを学んだ。ドイツの若者は政治に深い関心、それに対する個人の意見を持っていた。派遣前は政治に対して関心を深く持っていなかったため、帰国後は日本の政治、また隣国アメリカ、韓国の政治について勉強を始めた。また宗教に対する知識が足りなかったとディスカッション、交流の際に実感した。多民族国家やグローバル社会デモとも重要なことは他人を思いやり、尊重することである。宗教による違いを理解することは、相手を理解するうえで必要不可欠な要素なので、まずは三大宗教について学んでいる。今回の派遣で気づかぬうちに持っていた私の固定概念に気づくことができた。もし私自身がミスをしてしまったとしたら、自分である程度のところまで解決しようとするが、それは自分を責めすぎていること、日本人の典型的な間違いだということ学んだ。ドイツ人との交流では、ミスは誰もがしてしまうのだから、早めの共有、全員での解決が求められ、ミスを言い合える環境が整備されていた。私はその環境に強い関心と尊敬を持ったので、まずは私自身が相手との信頼関係を気付き、ミスを責める、責められるの関係ではなく互いに協力し解決していく方法を取り入れたい。

## ■今度行いたいこと

ドイツと日本には共有してある負の歴史が残っている。その国同士だからこそ、互いにその歴史を継承し二度と繰り返さない使命がある。私は広島原爆についての説明をそして相手国の歴史を知ることのできる交流をドイツ人と行いたい。また、国同士の壁を越え世界の若者同士での交流の場を確保し、定期的集まりたい。

■氏名：水野 峻木  
 ■所属団体：ベネブレイク@学生まちづくり  
 ■活動内容：岐阜県瑞穂市における地域活性化企画やイベント運営、投票啓発活動、社会性を養う青少年教育

### ■ドイツで学習したこと

#### 「若者の社会参画について」

研修中にドイツ団員や訪問先の方々から幾度も耳にした「民主主義」という言葉について、当初は政治的なイメージが強く、あまり身近に感じていなかった。しかし、ディスカッションや団体訪問を重ねることで新たな視点を持つことができた。それは「民主主義」という言葉の中に寛容性・平等性・公平性・異なる意見の尊重...などと様々な要素を持ち合わせていることである。これらを踏まえて、1人ひとりが決定プロセスに関与するということが社会参画において非常に重要であると認識した。加えて、最も衝撃的だったのは失敗に対する向き合い方が一般的な日本の現状と異なったことである。反省というよりも今後どうしていくかを考え、1人に責めることなくチーム全員で次の一歩まで寄り添っていた。また、その心情はネガティブなものではなく、「これからもっと良くなるチャンス」と捉えてポジティブかつワクワクした気分で向き合っていた。

### ■ドイツでの学習をどのように活かしたか。

滞在中、同じ事情に対する捉え方が違うことに度々驚かされた。同時にそれは今後の地域活動において非常に学びのあるものであった。よって、報告会のみならず、わずかでも地元地域の取り組みに広く活かしていただければという思いで地域に関わる様々な方にドイツでの経験を共有した。特に活動していく中で感じるメンタルの問題や失敗への向き合い方である。自身を含めて、困難が生じた際に心が折れてしまい、メンバーが活動から離れてしまうという事例も多く経験した。当初は思いを持って取り組んでくれた仲間がいなくなってしまうことは非常に残念である。日本では何か問題が生じた際に事後対応が主なメンタルケアとなっているが、メンタルに関して事前にきっちり対策をしておけばメンバーが離脱する事態が減り、活動自体もより円滑に進むと考える。また、失敗した時に必要以上の謝罪・反省、時には叱責で負の循環陥ってしまうと改善が思うように進まず、意欲低下や人間関係の悪化につながる恐れもある。よって、地域にこれらのことを浸透させるべく、他の地域団体や学校、地元の民間企業や行政にも働きかけた。

ザクセン州の子ども・若者コミッショナーやマイセン郡青少年フォーラムを訪問した際は、県(ドイツでは州)単位での青少年支援組織の重要性を痛感した。日本では国単位だと国立青少年教育振興機構、市町村では学校や社会福祉協議会という単位で青少年支援は行われているが、少なくとも地元の岐阜県に限っては県全体に焦点を当てた青少年に対する支援は確立されておらず、不十分だと感じている。このことから、気持ちを同じくする岐阜出身で東京の大学に通う2人とともに「トレハンぎふ」という新しい団体を立ち上げた。団体趣旨としては10代~30代前半を対象として、主に社会活動に取り組んでいる岐阜県に関わる人たちのプラットフォームづくりである。メンバー各々が取り組んでいる活動の交流や岐阜に関する議論などを通じて横のつながりを創出し、参加者にとって社会活動をする上で心のよりどころとなる組織を岐阜県で確立させたい。団体設立者3人でのミーティングを重ね、内部で少しずつメンバーを増やしながら、まずはキックオフイベントの開催を目指した。そして、2023年12月23日、岐阜県を中心地である商店街のイベントスペースでトークセッションをメインに実現することができた。そこでは、なぜ団体を立ち上げたかのトークや、団体設立者をはじめとした活動紹介、メンバー懇親会を実施した。40人を超える広い世代の方にお越しいただき、地元新聞2社にも県内版紙面にて掲載していただいた。現在は16人がメンバーとして加入した。その中には学生、鉄道・不動産・都市開発の会社員、銀行員、公務員、教員、新聞記者、アーティスト、起業家といった多分野の若者が集まった。

### ■今度行いたいこと

航空少年団ではメンタルや失敗への向き合い方、民主主義プロセスの経験を重要視したプログラムを構築したい。ベネブレイクでは学生のまちづくり参画に焦点をあて、学校との連携や地域活性化を絡めた主権者教育を瑞穂市で実現できるように取り組んでいきたい。新しく立ち上げたトレハンぎふでは、長期的には青少年をはじめとした若者が社会活動をする際に最初かつ最も頼れる岐阜のプラットフォームを築いていきたい。

## 7. 交流事業を終えて（団長 梅津 孝一）

### （1）成果

まずはコロナ禍を経てようやく4年ぶりに対面で日独青年リーダー交流事業が行われ、日独双方の国を訪問できたことが最大の成果であろう。今回の事業テーマは「若者の社会参画」であり、過去の交流事業でも扱われたテーマであるが、日独双方の団員も新鮮な気持ちでディスカッションに臨むことができた。

現地でも再会したドイツ団との合宿セミナーでは、若者の社会参画を促進するために社会においてどのような仕組みが必要なのか話し合いが持たれ、その中で両国での第2のテーマと成り得るキーワードとして「民主主義的社会」の構築ということが、浮かび上がった。訪問先の多くでも、民主主義というワードがたびたび話題に上がった。ドイツでは、ベルリンの壁が崩壊し東西統一後30年余りが経過した現在でも、国民の中で民主主義という言葉に対し、何らかの思いを抱いている人が多くいることが感じ取れる。あくまでも私見であるが、日本国内で民主主義という言葉があまり表に出ないのは、おそらくドイツとは違い、民主主義という概念が一定程度浸透しているという表れなのかもしれない。このことは、最終日の学生たちの発表の中でも色濃く表れているのでそちらもご覧いただきたい。

それに関連してデモ活動についても触れると、日本国内ではデモ活動は盛んとは言えないが、あまり若者は参加しないスタイルで都市部を中心に行われているケースが多い。その一方、ドイツでは気候変動に対する危機に対し政府へ強く対策を求めるフライデーフォーフューチャーという運動を通して、それに賛同した多くの若者が参加するデモ活動が行われることがある。我々がベルリンの象徴であるブランデンブルク門を訪れた翌日に、まさにそのデモが1万人規模で行われ、一部の過激な活動家たちが、門柱に塗料を吹き付けるなどの事件を起こし、日本でもニュースとして報道された。都市部以外の各地域から参加した日本の学生たちにとって、そのリアルな現状を肌で感じとることとなり、デモ活動に対する日独それぞれのスタンスが大きく異なることを実感できたであろうし、民主主義的価値観の違いも含め、その後のディスカッションでも、たびたび話題にあがるきっかけともなった。

また、ボランティアをテーマとしたディスカッションの中で、ドイツ団員からボランティアをしている人たちは、生活の面で経済的にも恵まれた環境にあることが多く、そうでない人たちはボランティアの存在を知るゆとりもなく、働かないといけないという人も多くいるという発言があった。この話を耳にし、今までそれをあまり意識せずボランティアをしていた学生達がいたとすれば、恵まれた環境に置かれているからこそ、ボランティア活動やその他の社会活動に参加できていることにハッとさせられた者もいたかもしれない。

学生たちが最終日の成果発表会に向け準備を進めていくプロセスを傍らで見守ってい

たが、日本団 10 人が毎夜、真剣に議論し合う姿を見て、この凝縮された有意義な時間こそが 2 週間の研修の集大成であり学生たちにとって、大きな成果として身を結んでいると言えるのではないか。

学生たちが、日頃から日本でそれぞれ自発的な活動をしてきている中で、今回の様々な立場にある機関・団体と意見を交えたことで、多くのヒントを得てそれらを取捨選択し、今後のよりよいボランティア活動へ結び付けていくであろう。学生たちは、成果発表の中で、自分たちが今後の活動で生かしたいことを各自が挙げており、それぞれの活動拠点でさらなるリーダーシップを発揮し、自分たちの思いを基に声を上げ活躍していくことに期待している。

## (2) 課題

今年の研修テーマ「若者の社会参画」を中心に日本国内そして訪問国ドイツでもディスカッションを重ねてきた。一つの大きなテーマとして進めてきたが、最初のドイツ団との顔合わせである日本国内での合同セミナーのあと、ドイツでの合宿セミナーでも同じメンバー同士が再度同じテーマでディスカッションを始めた。その際ドイツ団員の一部には同テーマを進めることに異議を唱えるような雰囲気を感じ取れたが、グループに別れてディスカッションが持たれた後は、一旦テーマから外れ、それぞれ興味深いテーマも交えて話が出来たことで、団員同士のディスカッションも活発化したという場面があった。それらの様々なテーマを経ることで若者の社会参画について双方でより深く課題認識するなどの共有を図ることでスムーズに 3 日間を乗り切ることができた。

交流事業を行うにあたって毎回テーマに沿ってディスカッションをしていくこととなるが、学生たちがそのテーマにどう向き合い、意欲的に関わっていくことができるのか、今後のテーマ設定についても見守っていきたい。

結びに、ベルリン日独センターをはじめ、それぞれの訪問先において実りある交流となるよう各団体・機関が、様々な工夫や仕掛けを考えてサポートし、我々を迎え入れてくれたことで、有意義な交流や深いディスカッションに結びつき充実したプログラムとなったことに感謝の意を述べたい。



# 受入事業報告

## 1. 参加者名簿

	氏名	職業・教育課程 活動団体
団長	シュテファン・ブロイヤー	研究・実習助手（大学研究所勤務）
	Stefan BREUER	公益有限会社エレメンツ・オブ・デモクラシー／事務局長
1	エリック・バムファステ	大学生（教職課程／社会科学・数学）
	Erik BAMFASTE	①デュッセルドルフ・ベルギシュラント地区ドイツ労働総同盟青年部 ②カール・フルロット・ギムナジウム／宿題サポーター
2	ザミーラ・ヘーラ	連邦ボランティア制度参加者
	Samira HERA	アバントゥ文化ラボ（NPO 自由な学び場）
3	ペーター・ヒンツ	大学生（社会福祉学専攻）
	Peter HINTZ	ナウハイム町コミュニティ
4	ハンナ・ヤネツェック	大学生（法学専攻）
	Hannah JANECZEK	スポーツクラブ「フォルトゥーナ」フェル 1924／コーチ
5	ツイリル・コッホ	大学院生（修士課程／情報学専攻）
	Cyrill KOCH	インゴルシュタット市青少年連合
6	ザーラ・ロット	大学生（デジタルメディア文化学専攻）
	Sarah LOTZ	[U25] ベルリン 25 歳未満オンライン自殺予防相談（ベルリン大司教管区カリタス連盟）
7	カロリン・マイヤー	10 月より大学進学予定（地理学専攻）
	Caroline MAYER	インゴルシュタット市青少年連合
8	アニーサ・スマーヨヴィッチ	大学院生（修士課程／カウンセリング・心理社会相談）
	Anisa SMAJOVIC	シュターデ市青少年育成課



日独学生青年リーダー交流事業ドイツ団

## 2. 日程

日付	場所	時間	プログラム
8月28日 (月)	ドイツ	午後	フランクフルト国際空港 発
8月29日 (火)	東京	午前 午後	羽田空港 着 オリエンテーション 青少年教育振興機構 概要説明
8月30日 (水)	東京	午前 午後	講義：「日本における若者の社会参画」 青少年教育研究センター 大山 宏 氏 意見交換：機構若手職員とのディスカッション 経営企画室 河村 幸音 室員 事業企画課 佐藤 博幸 係員 業務課 晴山 佑樹 係員 団ミーティング
8月31日 (木)	東京	午前 午後	訪問：認定NPO法人フリースペースたまりば 事務局次長／理事 鈴木 晶子 氏 訪問：NPO法人iPledge 事務局スタッフ 山口 記世 氏 団ミーティング
9月1日 (金)	東京	午前 午後 夜	団ミーティング／東京プログラムの振り返り 日独合宿セミナー（ディスカッション） 歓迎夕食会
9月2日 (土)	東京	午前 午後	班別フィールドワーク 日独合宿セミナー（ディスカッション）
9月3日 (日)	東京	午前 午後	日独合宿セミナー（ディスカッション・個人発表会） 団ミーティング
9月4日 (月)	東京	終日	自主研修
9月5日 (火)	東京 奈良	午前 午後 夜	奈良へ移動 文化体験：伊賀流忍者博物館／伊賀上野城 歓迎パーティー
9月6日 (水)	奈良	午前 午後	施設オリエンテーション 曾爾青少年自然の家 概要説明 訪問：曾爾村学童保育 団ミーティング
9月7日 (木)	奈良	午前 午後	訪問：御杖村立御杖小学校 給食体験 訪問：御杖村立御杖中学校 体験：亀山ハイキング 団ミーティング
9月8日 (金)	奈良	午前 午後 夜	文化体験：浴衣の着付け・茶道 意見交換：曾爾ボランティアとのディスカッション 曾爾ボランティア企画
9月9日 (土)	奈良	終日	自主研修（奈良公園付近） 団ミーティング／学習成果発表会の準備
9月10日 (日)	奈良 大阪	午前 午後	学習成果発表会 大阪へ移動
9月11日 (月)	大阪 ドイツ	午前 午後	大阪国際（伊丹）空港 発 → 羽田空港 着 羽田空港 発 → フランクフルト空港 着

### 3. ダイジェスト

<8月30日(水)>

#### ○講義「日本における若者の社会参画」

講師：青少年教育研究センター 大山 宏 氏

「日本における“社会参加”の難しさ」から紐解き、日本における若者の社会参加の歴史から現状までをご講義いただいた。社会参画がもたれるイメージを欧州と比較し、何をもってして社会参画のゴールとするのか、ディスカッションを交えて学びを深めた。



#### ○意見交換：機構若手職員とのディスカッション

経営企画室 河村 幸音 室員 事業企画課 佐藤 博幸 係員  
業務課 晴山 佑樹 係員

初の試みとなった当プログラムは、自身も学生時代にボランティア活動経験がある機構職員を集め、当時の想いや始めたきっかけ、経験が今どう活かしているか等をご紹介いただいた。前講義担当の大山氏をファシリテーターとし、活発なディスカッションが展開された。



<8月31日(木)>

#### ○訪問「認定 NPO 法人フリースペースたまりば」

説明者：事務局長／理事 鈴木 晶子 氏

「居場所」をキーワードに、社会参画の多様な在り方について学んだ。異質・異年齢が混ざり合うインクルーシブな場において、安全・安心な居場所づくりを行うことの重要性について学んだ。



○訪問「NPO 法人 iPledge」

説明者：事務局スタッフ 山口 記世 氏

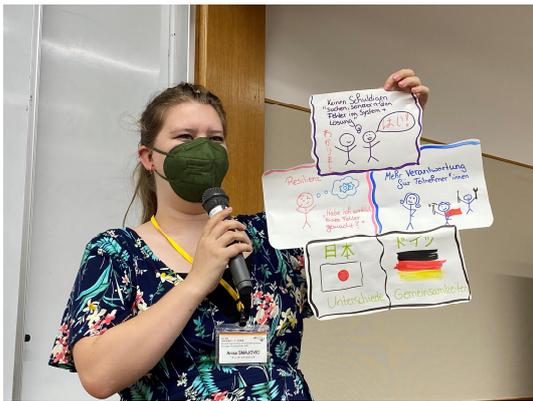
参加型社会を目指すうえで、どのような活動をしているのかご紹介いただいた。実際に活動しているボランティアスタッフにも同席していただき、社会に対して自分たちがどう関わっていきたいのか、意見交換を行った。



< 9月1日（金）～3日（日） >

○日独合宿セミナー（ディスカッション／個人発表／交流会）

今年度派遣される日本団と、2泊3日で合宿セミナーを行った。テーマに基づいたディスカッションだけでなく、班に分かれて都内フィールドワークを行ったり歓迎交流会を行ったりと、フォーマルの領域を超えたつながりができた。最後には個人発表の時間を設け、自身が大事にしたいことやこれから達成したいことについて、ビジョンを共有しあった。



< 9月5日（火） >

○伝統文化体験①「伊賀流忍者博物館、伊賀上野城」

奈良と三重の県境に位置する曾爾青少年自然の家周辺の歴史・文化を学ぶために、伊賀地方を訪問した。忍者博物館では忍者実演ショーを見学し、忍者がどのような武器を使い、役割を果たし、自分の身を守ったのかを学び、伊賀上野城では城や歴史上の人物について学んだ。



< 9月6日（水） >

○訪問「曾爾村学童保育」

曾爾村にある「曾爾村学童保育」に訪問し、過疎地域の学童に通う地域の子どもたちの実状を学んだ。また、ドイツ団は2つのブースに分かれてドイツの遊びについてのワークショップを開催し、学童の児童との交流を深めた。



< 9月7日（木） >

○訪問「御杖村立御杖小・中学校」

曾爾村に隣接する御杖村にある「御杖小・中学校」を訪問し、学校による説明や児童・生徒との交流を通して日本の小中学校や地域の子どもたちの実状を学んだ。

第一部では、ドイツの遊びや団員の小学校生活の紹介を通して小学生との交流を行い、児童にとってもドイツについて学ぶ時間となった。交流のお礼に小学生から歌や演奏のお返しがあり、昼食の時間は、子どもたちと一緒に給食を食べ、日本の学校生活の一部を体験した。

第二部では、ドイツ団が考えた遊びやドイツに関するクイズや生徒からの質問を通して中学生との交流を行い、ドイツに対する知識を深める時間となった。また、ドイツ団からはドイツの歌をお披露目し、生徒からはドイツ語でお礼の言葉が述べられた。



○自然の家活動プログラム体験「曾爾高原ハイキング」

曾爾青少年自然の家が学校団体などに提供している「曾爾高原ハイキング」を体験した。職員の話聞きながら雄大な曾爾高原の自然について学んだ。



< 9月8日（金） >

### ○伝統文化体験②「着物／茶道体験」

着物（浴衣）の着付け体験では、着物を着た際の歩き方や座り方を体験しながら教わり、茶道体験では所作や作法ひとつひとつに意味があることを通して、物を丁寧に扱うことやおもてなしの心を学んだ。浴衣の着付け・茶道体験を通して、日本の伝統文化に触れる機会となった。



### ○曾爾青少年自然の家 法人ボランティアとのディスカッション

はじめに、各々のボランティア活動の「ボランティアへの参加動機」、「好きなボランティア活動」について意見交換を行ったうえで、曾爾ボランティア及びドイツ団それぞれから活動紹介があった。活動紹介を経て、「ボランティアを続けている理由」についてのディスカッションが行われた。

ディスカッションでは「ボランティア活動を続けている理由」として、「楽しいから」、「社会貢献できるから」、「自分の成長に繋がるから」、「民主主義の役に立つから」等、双方から様々な理由について述べられたが、曾爾ボランティアおよびドイツ団に共通した意見としては、「楽しいから」や「社会貢献」などがあることが分かり、有意義なディスカッションの時間となった。



### ○ボランティア交流企画

曾爾青少年自然の家のボランティアが「日本の昔遊び体験」を企画し、けん玉やこま回し、めんこなどで交流した。また、ディスカッションで話し足りなかったことやお互い感じた疑問や質問などを意見交換し、更に親睦を深めた。



< 9月9日（土） >

○訪問「奈良公園周辺」

曾爾青少年自然の家が所在する奈良県の歴史・文化を学ぶために、奈良公園を訪問した。奈良公園周辺では、東大寺や春日大社など、世界遺産である寺社仏閣を自由に見学し、古都奈良の歴史や文化について理解を深めた。



< 9月10日（日） >

○学習成果発表会

2週間で学んだことを「①ドイツで議論されている内容及び課題」「②日本で特徴的だった内容」「③日独の共通点と相違点」「④ドイツでも実践したい考え方や取り組み」の観点からまとめ、学習成果発表会を行った。



#### 4. 学習成果発表会



Deutsch-Japanisches  
Austauschseminar für  
junge Ehrenamtliche  
2023

2023年度日独  
学生青年リーダー  
交流事業

Abschlusspräsentation  
学習成果発表

### Geschichte des Ehrenamts in Japan

- Dörflich organisiert in Jugendgruppen
- Professionalisierung/Übernahme hoheitlicher Aufgaben durch Staat während der Meiji-Zeit (1868-1912)

→ Rückgang der Ehrenämter

Nach dem Krieg: Lebenslange Beschäftigung (Erwartung zu Arbeiten)

→ nach den Studentenunruhen der 1960er: neue Erziehungsnorm „anderen Menschen keine Probleme machen“

In Städten entsteht die „Graswurzel-Partizipation“

In einer internationalen Studie:  
Nur 35,4% von jap. High School SchülerInnen haben das Gefühl, eine Veränderung bewirken zu können-

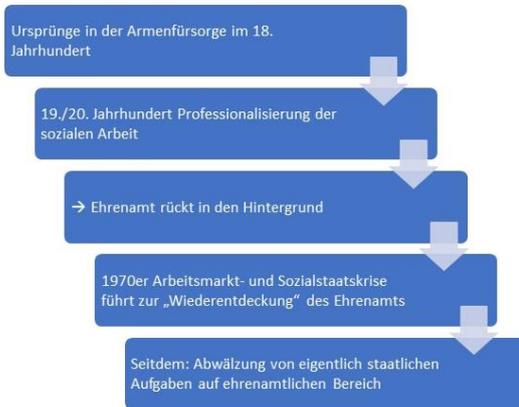
### 日本のボランティアの歴史

- 農村部で「青年団」や「青年会」という組織が作られる
- 明治時代（1868-1912）に入ってから専門化／国家によって統制化されるようになっていく
- → ボランティアの減少
- 戦後：終身雇用（仕事最優先）
- 社会運動が鎮圧され、新しい教育では「他人に迷惑をかけることが重要視される
- 都会では「草の根運動」が始まる

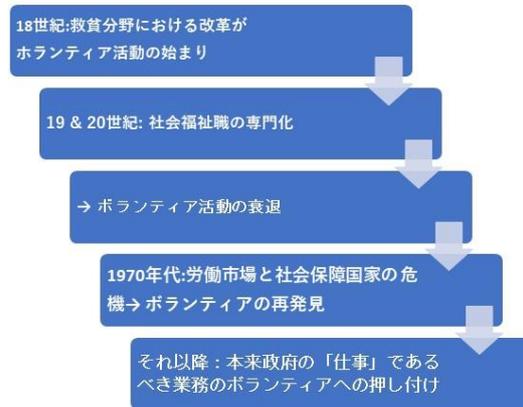
→ 社会参加についての国際的な調査：「社会現象が少しでも変えられる」と答えた日本の高校生が35.4%（突出して低い）



## Geschichte des Ehrenamts in Deutschland



## ドイツにおけるボランティアの歴史



## Exkurs: Freiwillige Feuerwehr Deutschland

- Ab 1745 erste Nennungen
- Dörfliche Organisationsstruktur
- Heute vor allem in ländlichen Gegenden für den Brandschutz wichtig

## ドイツにおけるボランティア消防団

- 1745年以降、文献に登ずるよう
- 村単位で形成される
- 今なお、地方の消防活動において欠かせない重要な存在



## Heutiger Stand: Deutschland



- 2019: 40% der Deutschen sind ehrenamtlich tätig (Anteil der 14-29-jährigen 42%)
- Freiwilliges Engagement ist eine zentrale Säule in der Gesellschaft
- Ehrenamt ermöglicht gesellschaftliche Teilhabe

### ドイツにおけるボランティア活動の今

- 2019年：ドイツ人の40%がボランティア活動に参加（14～29歳の割合は42%）
- ボランティア活動は社会の重要な柱
- ボランティア活動を通して、社会参画が可能

## Heutiger Stand: Japan



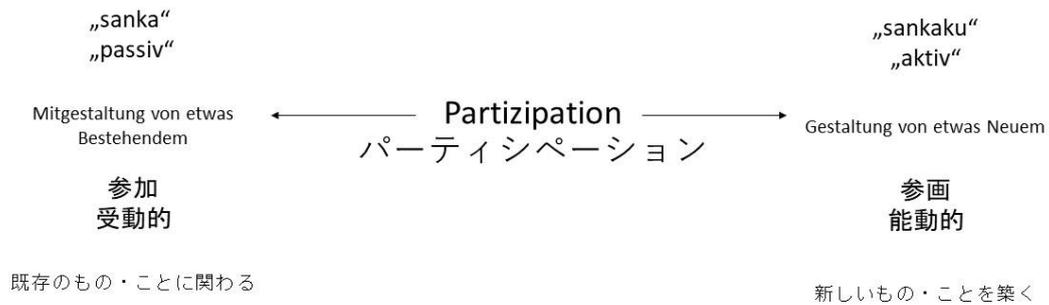
- Hauptengagement im jungen Erwachsenenalter
- Neue Chancen zu gesellschaftlichen Partizipation:  
Senkung des Wahlalters auf 18 Jahre & Ehrenamtsurlaub  
→ Ermöglicht Ehrenamtlichen soziale Umwelt zu gestalten

### 日本におけるボランティア活動の今

- ボランティア活動に関わるのは主に若年層
- 新たな社会参画：投票年齢は18歳～&「ボランティア休暇」制度の導入  
→ ボランティア活動を通して、社会を変えることができる

# Ehrenamt ボランティア

- Definition: Bezeichnung des freiwilligen Engagements bzw. Beitrags zur Gesellschaft ohne Vergütung



- 定義：無報酬で社会に自発的に関与または貢献することを指す。

## Ehrenamt

- Vielfalt
- Ähnliche Motivationen (Spaß)

### Probleme und Herausforderungen

- Nachwuchs
- Zeit
- Einstellung der Gesellschaft
- Einfluss auf Karriere
- Ehrenamt als Privileg
- Wenig Wertschätzung

## ボランティア

- 多様な活動
- 活動する動機が似ている (楽しみ)

### 問題と課題

- 次の世代を育てる
- 時間
- 社会から理解されない
- キャリアへの影響
- ボランティアできることは特権
- 活動があまり評価されない・期待値が高い

# Ehrenamt - Vergleich

## ボランティアの日独比較

Gemeinsamkeiten	Unterschiede
Ausübung des Ehrenamts vor allem im Altersspektrum „seishonen“	Zur Verfügung stehende Zeit ist noch knapper in Japan
Ehrenamt als Privileg	Wertschätzung/Ansehen in der Gesellschaft (Juleica Karte)

共通点	相違点
ボランティアに関わるのは主に青少年	活動できる時間が日本の方でさらに短い
ボランティアは特権	社会（周り）からの評価・見られ方（ボランティアカード）





## Kulturelle Aspekte

NIYE

IPledge

Freespace Tamariba

Schulhort Soni

Grund- und Mittelschule Mitsue

Soni Youth Outdoor Learning Center

## 文化的な気づき

NIYE 国立青少年教育振興機構

IPledge

Freespace Tamariba

曾爾村の学童保育

御杖村の小学校・中学校

曾爾自然の家

## Kulturelle Aspekte

## 文化的な気づき

### Fehlerkultur

- unterschiedliche Fehlertoleranz
- Fokus Entschuldigung/Lösungen

Lessons learned: Eigentlich ist Entschuldigung nicht so wichtig wie Lösungsfokussierung.

Beratschlagung im Team über Probleme → Lösungsfindung

### 「ミス」の文化

- ミスに対する厳しさ
- 謝罪を求める vs 解決策を求める

### 学んだこと:

謝罪するよりも、解決方法を模索する方が重要。

チーム全員で問題点について話し合い → 問題解決

## Kulturelle Aspekte

## 文化的な気づき

### Unser japanisches Wörterbuch

Iken  
Seishonen  
Yoka  
Borontia  
Sanka - sankaku  
Moia Moia



### 私たちの「日本語」辞典

意見 (opinion + view)  
青少年  
余暇  
ボランティア  
参加 - 参画  
モヤモヤ



## Kulturelle Aspekte

### Teezeremonie:

-jede Bewegung hat einen Grund

Früher: Steigerung der Konzentration, Bewirtung

Heute: Hobby, manchmal Gastfreundschaft

### Yukata:

- familiäre Weitergabe der Tradition

- Einheitsgrößen

- Wertschätzende Offenheit

## 文化的な気づき

### 茶道体験

・すべての動作に意味がある

昔：集中力を高める、客のおもてなし

現代：趣味、たまにおもてなし

### 浴衣体験

・家族の中で伝える文化

・フリーサイズ

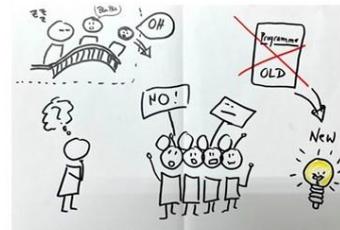
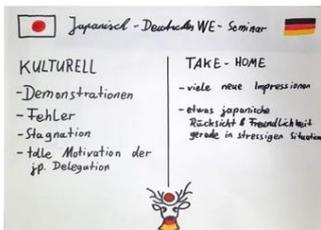
・誰でも参加できるオープンな文化

## Zusammenfassung

## まとめ

- Partizipation ist unabdingbar für die Demokratie sowohl in Japan als auch in Deutschland

- 日本でもドイツでも「参画」が民主主義にとって重要で不可欠なポイント



In unseren Koffer packen wir diese „moia moia“ Fragen:

- Was ist eigentlich das Politische?
- Wie können wir unsere Demokratie gestalten?

ドイツに持って帰りたい「モヤモヤ」課題

- 政治とは何か?
- 民主主義をどのように形成し、時代に合わせられるか?

## 5. 成果と課題（国際・企画課）

### （1）企画

本事業では、ドイツ団が日本でボランティア活動等を通して社会に参画している学生や団体と交流することで、日本とドイツの若者の社会参画について、日独の比較をすることを目的としてプログラムを構成した。都市で活動を行う若者と、地方で活動を行う若者双方と意見交換をすることで、日本全体の社会参画に関する現状を学んだ。

学習成果発表会では、テーマである「若者の社会参画」について、学んだこと、日独の共通点や相違点、今後周りに還元できることの3つの視点から、考えをまとめた。

### （2）成果

まず、成果として挙げられるのは、ドイツ団が訪問プログラムや日本団との合宿セミナーを通して、社会参画の定義や歴史等の根幹を学んだうえで、若者の社会参画に関する日独の共通点・相違点を学べたことである。ボランティアに対するイメージや課題だけでなく、文化（風習）的な気付きに関しても言及していた。特に、「ミス」に対する反応について意見交換をしており、団体や活動を持続可能なものにするために必要なことをまとめていた。「謝罪を求める」のか「解決方法を模索する」のか、自分たちの団体や活動歴を踏まえたうえで語り合い、学習成果発表会にも反映していた。

また、同年代の若者であっても、社会参画に対する着目点は異なり、政治に関する注目度合いには大きな差が発生していた。だが、意見交換を重ねていく中でそのことに気づき、日本団員に対して意見を引き出す問いかけ（質問）を行っていたのは、合宿セミナーをよりよい学びの場にするために不可欠な出来事であった。そして、ドイツ団は日本に対して「若者と政治の関わり方」について提言しており、学校で政治に関する授業を行ったり、幼い頃から家庭で話題に出して自分の考え・意見をもたせたりすることが重要だと述べていた。自分の考えをもつことは政治参加に限らず重要なことであるため、意見交換をしていた日本団員が普及することに期待したい。

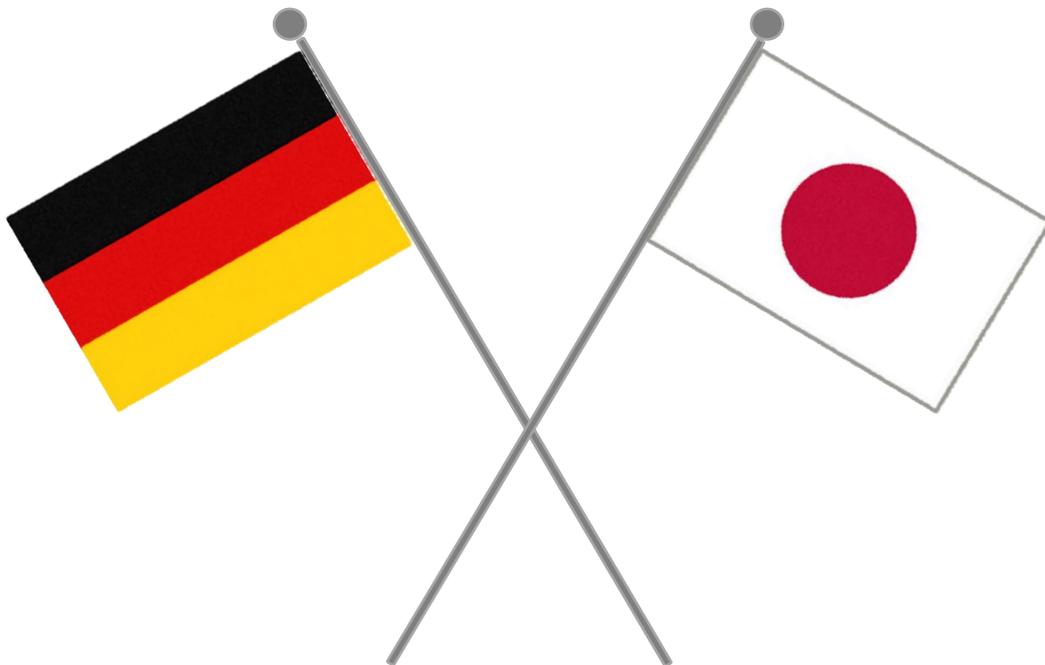
### （3）課題

課題としては、訪問先の選定や移動手段が挙げられる。訪問先の選定に関しては期間的に学生が帰省していることが多く、訪問を断られることがある。そして、ドイツ団からは、意見交換の時間を多く設けてほしいという意見があり、約3時間の依頼をするとなると、早めの選定及び打合せが必要になる。また、予算の都合上公共交通機関で移動をしていたが、訪問の順序を調整することで浮いた時間を、意見交換等に充当することができるかもしれない。

これらを解決するためにも、次年度以降については、訪問先の選定を早めに取り組み、ルート等を考慮したうえでプログラムを設計していきたい。

今回の企画・運営に際し、多くの方に携わっていただいたことで、ドイツ団の有意義な研修を展開することができた。プログラムに協力していただいた全ての方に感謝を申し上げます。





令和5（2023）年度 文部科学省委託事業  
日独学生青年リーダー交流事業 事業報告書

---

令和6年3月発行

編集発行



独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国際・企画課

<http://www.niye.go.jp>

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

TEL 03-6407-7725

---

本報告書は、文部科学省の委託事業「青少年国際交流推進事業」として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施した令和5年（2023）年度「日独学生青年リーダー交流事業」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。